

## 第四章 秘密の衣装

1.

「ウチに、遊びに來たい？」

「……そうだ」

弁当をかつ込んで食べてから湿った日陰の呼び出し場所へと急ぎ向かってみれば、無表情のチビ助の話とは結局それだけのことだった。脱力する。要領を得ないのでさらに訊く。

「お前一人で？」

「……カミシナがよいなら私はそれでも構わない」

オレは終夜と部屋で二人きりになったところを想像する。無限大の沈黙。そしてそれだけ。頭が痛くなってきたところで終夜が付け加えた。

「……話を持ち出したのはレイオウだ。出来ればフタバも呼びたいそうだが、いつの間にか双葉まで呼び捨てになっている。まだ話が見えない。」

「まあ、別にいいけど……てことは、昨日オレらが帰った後でレイオウが言い出したのか？ オレンち行きたいって」

「そうだ」

「じゃあさっさとメールくれればよかったのに。あんな時間まで何してたんだ」

「……文面をどうするか悩んでいただけだ」

九時間近く悩んだ末に新入生をシメる不良の常套句へ辿り着いたのか。

「レイオウが直接出せばいいじゃん。それにそれだけの話なら直接会わずにメールに書けば」

「……私がカミシナにメールしたいと言ったから私が出すことになった。私がかミシナと会話したいと思ったから呼び出すことにした。悪いか」

「まずまず理解に苦しむ。」

「じゃあ教室で話すんじゃないダメなの？」

「教室では最近やたらと話しかけてくる妙な女がいるから面倒くさい」

ああ、とオレは頷く。速水さんだ。彼女もよく分からない人である。先週辺りから大した用もないのにしきりに終夜へ話しかけるようになったの

だ。今朝も延々頑張っていたが終夜の方はヘッドフォンを外しもしない。ちなみに今は、外して首に掛けている。

「それに、人目のない場所で直接会わないと、出来ない用もある」

そう言うと、終夜はスカートのポケットに手をつ込んだ。何かとんでもないものが出てくるんじゃないかとオレは身構えたが、なぜか出てきたのは、

「メジャー？」

裁縫セットに入っている布メジャーだった。終夜はこくりと頷くと、メジャーを一メートルほどシャツと引っ張り出して、こう言った。

「……測らせろ」

強い眼差しの終夜は妙に迫力がある上に意味不明だった。

「なんで？」

「黙れ」

あんまりだ。

日の当たらない草むらで、終夜はメジャーをオレの身体各部へしきりにあてがってくる。しかも小柄で手が届かないせいか、やたら距離が近い。密着してくる。ぴったり身体を押しつけるようにして、熱心に腕だの首周りだの股下だのを測ってくるのだ。明らかに測る必要のない部分も執拗に測定している。時々メジャーが首や腕に絡みつく。終夜の妙に荒い息が耳をくすぐる。悪い気はしないが、どうしてよいやら分からない。

「もういいだろ」

「うるさい動くな」

ため息。かくしてひたすら為されるがままのオレは、間近でひとしきり終夜の顔を観察していた。小ぶりで整った顔立ちで睫毛も長いし、思いの外美人だな、なんて寝ぼけたことを考える。美人の……小学生みたいだ。

最後に背後から抱き付くようにして胸囲を測られたところで昼休み終了前の予鈴が鳴った。

なぜかほのかに上気した風の終夜は、息をつくくと、オレの顔を見上げる。

「……日取りと時間は追ってメールする」

言うなりくると背を向けて、終夜は足早に行ってしまった。残されたオレは腕を組み、少しの間その場で首をひねっていたが、アホらしくなっ

たので教室に戻ることにした。睡きみすを返す。

すると、すぐその角から大野が出現した。

「やあ神志那くん。よかったら話を聞かせてもらえるかな」

ゲストを歓待するアメリカ人の笑顔で話しかけてくる。すこぶるウザい。

ダルい気持ちで何も応えずにしていると、大野の後から林田だの南川だの須本だのクラスの男子数名が、逃亡犯を追い詰めたFBIのような自信に満ちあふれた表情で続々と姿を現した。

先頭に立った大野が、挑戦的な目付きで言う。

「先週末ではあんなに縁遠かったお二人が、なぜ朝からチラチラ目を合わせ、携帯を何度もソワソワと確認し、昼休み早々に抜け出して体育館裏で密会しているのか、ご教授願いたい」

ヒマ人どもが。皮肉を込めてオレは言っちゃった。

「お前らそんなに終夜に興味があつたのか」

「女子一般に万遍なく興味がある」

大野は声高にそう断言した。

「それに終夜も性格はアレだが、顔はなにげに美形だろ。小学生体型っていうのもなかなかポイント高い。なあ神志那、あいつその上意外とエロかつたりするのか？ さっきのもずいぶん斬新なスキンシップだったな。測定プレイか。かわいい顔して、この……変態め！」

ニヤつく大野はわけの分からないことを言って一人興奮している。見れば他の連中も、猛烈な嫉妬と得体の知れない憧憬どらけいを込めた眼差しを向けてくる。メジャーをあてがってるだけの光景でどんだけ盛り上がれるんだ。頭が痛くなってきたオレは肩を落とした。大体、あんな冷めたヤツがスケベなわけないだろ。

こいつらのようなネットの極意を知らない一般男子の目に付く範囲からは、教育省キョウイクシヨウ及びPTAの手によってきれいさっぱり「男の夢」が取り除かれていた。そのため、思春期学生はたぎる青春エネルギーをこのようにすべて妄想へ注ぎ込まざるを得ない状況なのである。

世人はオタクを不健康だと評するが、オレにはクラス的女子だけで無限大のエロを想像して日夜悶々としているこいつらの方がよほど不健全に思えてならない。むしろ逆に危険なんじゃないか？

2.

その後も一日中オレはこのアホどもに付きまとわれて、オレと終夜の関係そして終夜インラン説についてありもしない説明を求められ続けた。終夜自身に助けを請おうとしたが、いつ見ても休み時間ごとに彼女の前には速水さんがいて、目を合わすことすら叶わなかった。

ゲツソリしたオレは放課後、見つからないようすばやく荷物を持って教室から逃げ出した。一応オレも電気部なんてお寒い部活に所属してはいるものの部活自体が有名無実、ほとんど行ったこともない。

しかし校舎から出てコソコソと門へ向かって歩いてみると、背後から元気な声が飛んできた。

「神志那くん！ そんなところで何してるの？」

びくりと振り向けば、そこにいたのは速水さんだった。しかもテニス部のユニフォーム姿だ。ラケット、サンバイザー、半袖ポロシャツの胸はなかなか窮屈そうで、そしてなんととってもスコート。素晴らしきかな。白い太ももが制服とは比べものにならないほど露わになっていてもう、「どうしたの？」

「何でもありません」

焦って首を振ってから、額を押さえてオレは嘆息した。考えてみりやオレもあいつらと同レヴェルだ。エネルギーは無量大なのだから、どこへ注ぎ込もうと結局同じなのかも知れない。

幸い速水さんは何も気づかなかつたらしく、こぼれるような笑みを満面に浮かべてオレと向き合うばかりである。オレはごまかしがてら話を振る。

「あの、速水さん、今朝からなんだか機嫌いいよね？」

「倫でいいって。うん、そう。昨日ちよつとね、いいことがあったの。神志那くんももうすぐ分かるわ。楽しみにしててね」

鼻唄でも歌い出しそうな雰囲気だった。こんなに機嫌なものだから、朝から延々終夜に無視され続けてもくじけることなく話しかけることが出来たのだろう。ただならぬ精神力だと思う。

「あのさ、はや……倫、さん、その、なんで今日ずっと終夜に話しかけて

たの？」

ゆっくりと言葉を選びながら、オレはそう尋ねる。どうも速水さんは、苦手だ。

彼女は初めきよんとしていたが、やがて「どうしてそんな当たり前のことを訊くの」とでも言いたげな顔をしてこう言った。

「だって、かわいそうじゃない」

「……かわいそう？ 終夜が？」

「ええ」

彼女としてはこれで説明は終わりらしかった。だがオレにはどういう意味なのかも分からない。あんな自由に奔放に過ごしている終夜の、どこがかわいそうなんだ？ 微妙な気まずい沈黙がオレと彼女の間に続く。今日も嘔み合っていない。

「……だって、クラスの中で誰とも仲良く過ごせてないのよ。いつ見ても一人で、寂しそう。あんまりだと思わない？ 仲間に入れてあげないとかわいそうよ。だから、あたしが最初に友達になろうと思って」

ピンと来ないオレを見て困惑した速水さんがそこまで解説してくれたところで、やっとオレは了解した。それと同時に、首を傾げた。

終夜がクラスで友達を作らないのは明らかに、仲良くしたい奴がいないからだ。うちのクラスでアイツとまともに会話が成立すると思われる女子は一人だっていないし、そんなヤツがそうゴロゴロいてもらっても困る。だから仲良く過ごしていないのは終夜の迷惑通りで、それなら別に、かわいそうでもない。加えてアイツは、大して寂しそうにも見えない。下手に

女子軍団の中に入れる方が、余計に孤立感が強まるだけだろう。

けれど速水さんにとっては、一人でいる＝寂しい＝かわいそう＝助けてあげないと、という方程式は自明で絶対不変らしい。それで、多少のことにもめげずに終夜アタックを続行している。オレや終夜とは前提からして違っているのである。

実のところ、オレも何かと一人でいることが多い（何だかんだ言って最後には大野みたいなヤツが寄ってくるが）。だけど強がりではなく、寂しいと思ったことは特にない。友達と違って用もないのに一緒にいようとは思わない。一人でいるならその状況を甘受して、それなりに楽しむ。それだ

けだ。そのことを気にしたことも恥じたことも、ない。

「だから、終夜サンもきつとそんな感じなんじゃないかな」

と、オレが面倒を避けて自分のことをごまかしながら婉曲的に話すと、途端に速水さんは映画のラストシーンのような切ない表情になった。

「……それは、寂しいことだと思うわ」

え？

「それは、とても寂しい人。自分ではそう思っていないなくても、心の中はとでも、寂しいと思う」

そう、なんですか？

「そしてそのことに自分で気づけないのが、一番哀しいことだわ」

まっすぐな眼をして速水さんはそう言い切った。彼女の話し方はいつも、芯の強さを感じさせる。オレのようなふやけた人間は、それだけでもう圧倒されてしまう。こうも自信満々に確言かくげんされると、そうかな、オレも寂しいかなあ、なんて気になってくるから困ったものだ。

「あたしが彼女の最初の友達になってあげようと思うの。神志那くんも協力してね」

断るわけにもいかずボヤボヤと頷くが、うーん、最初の友達、か。オレもアイツとは、全身をくまなく測定されるほどの親しい仲なのだが。正面切って友達と呼ぶのは躊躇ちゅうちよしてしまう。

「あ、それから……よかつたらその……あたしとも……」

そこで急にほんのりと顔を赤らめた速水さんは少しの間もじもじとそんなことを言っていたが、すぐにううん、なんでもないの、と言って、爽やかに手を振るなり、テニスコートの方へ走って行ってしまった。

なんだありや。腕を組んで考えるオレの脳裏に、大野の言葉が甦る。

オレにホレ……？

いやいやいや。そんなはずは、絶対がない。彼女に同性趣味がない限り、オレの面おもてで気に入ることは有り得ない。これも、大野の思春期妄想症の一環だろう。

深く息をついてから、オレは早速練習を始めた速水さんの躍動する麗うるわしいお姿をしばらくの間遠目に拝見していたが、ふいに頭上、校舎の窓から「見つけたぞ神志那あ話はまだ終わっちゃいない！」という声が降って

きたので、急ぎ帰路へ向けて走り出した。

3.

翌日以降も終夜は速水さんに捕まったままだったし、男子連中の間では「終夜は実はインラン娘であり、純真な美少女あいちー（オレ）をたぶらかして密会を重ねてはあんなことやこんなことをやっているのだ」という最早入院ものの噂が蔓延まんえんしていたため、オレもつかつには近寄れなかった。そうした中、終夜からはただ一通、今週の土曜日の午後一時レイオウと共に訪問するから住所を教える、双葉にはお前から連絡しておけ、という極道のような文体のメールが来たきりだった。

ちなみに、週の半ばにはそのエロ噂がとうとう女子の耳にも入ってしまった、心底怒った速水さんが、卑劣な男子の眼から終夜を守るために大立ち回りを演じて、男子や一部の女子から疎まれて、それでも決して引くことなく幼稚な男子を糾弾きょうたんし、帰りのHホーム・ルーム Rで二つの派閥に分かれたクラスの全員を相手に、一方的な噂を流されることがどんなに辛いか、悲しいことかを、涙ながらに訴えて見事勝利を収める、という感動的な一幕があった。実に感動的で、素晴らしい出来事であった。

……が。

大して重要ではないので、割愛かつあいする。

というか、そもそも終夜自身が噂を全く気にしている様子がなかったのである。どう考えても終夜までその噂は届いていたはずなのだが、アイツは結局、怒っても悲しんでもいなかった。ああそう、という程度である。そのせいで、被害者の一人でもあるはずのオレも熱が入らず、結局当事者二人は終始ぐだぐだのまままで周りだけが騒ぎ立てている、といういわゆる台風の眼状態だったのだ。

騒動が一通り済んだ木曜の放課後、噂のことをどう思っていたのか、と終夜にそれとなく訊いてみた。

「へえ、と思ったが」

そうですか。それにしたって、少しぐらい否定すればいいだろ。

「なぜだ？」

なぜって……うん、まあ別にそんな噂があったところでお前は困りもしないんだろうけど。

「そんな理由ではない」  
なんのこっちゃ。

噛み合わないというなら、むしろコイツの方がよっぽど噛み合っていない。単に速水さんとは住む世界があまりに違いすぎるから、オレが対処しきれないだけだろう。

それに、終夜は当人が初めから万全なコミュニケーションを期待していないのだ。よって噛み合わなかったところで、オレも終夜も別段気にならない。平和なものだ。

そんなことはともかくとして。木曜の夜、双葉がうちに遊びに来たとき、オレは遅ればせながら、土曜の話を伝えた。

ヤツらが何を企んでいるか分からない、何が起こるか予見できない、極めて危険といえる、唯一確かなのはオレの身に何らかの危険が迫っているということである、ということろまで懇切丁寧に知らせたのに、双葉は無邪気に喜んでるばかりだった。

『楽しみだね、愛くんがどうなっちゃうのか』

ドラマの続きくらいの興味はあるらしい。悲しい。しかし双葉が喜んでる以上、オレとしては逃げ出すことも断ることも出来ない。かくしてオレは量刑不明のまま処刑を待つ心持ちで、一週間を土曜までの日数を数えて過ごす羽目になった。

ところが翌日、金曜の朝、若干の波乱があった。

4.

「あー、今日は、みんなにいいお知らせがありまーす」

エロス大王担任寺嶋が、朝のHRでいつも通り気のない話を始めた。いいお知らせのわけがない。

「先週道徳ドクトキャンプに旅立った八木沼だけでも……えーと、早くも帰ってきました」



それを聞いて、オレは耳を疑った。道徳キャンプは、本来月単位で行われる矯正プログラムのはずだ。各地方ごとに山奥に設置された施設へ送られる、という話で、二週間弱で出てこられるようなものじゃない。教室全体もざわついている。

「えーそのー、俺はよく知らないんだけど、何かこう、上の方で、早めに済ませよう、みたいな話になったみたいで……それで八木沼も、カリキユラム短期間で終えて、帰ってきたみたい、だね」

いつも以上に寺嶋の歯切れが悪い。視線もこちらに合わせようとしなない。「だからいろいろ大変だったみたいで、今ちよつとその、八木沼も疲れている部分があるみたいだけど、お前もまあ、温かく迎えてやるように。えーじゃあ八木沼、入って」

そしてその言葉と共に教室に入ってきたのは、オレの知っている八木沼ではなかった。

髪が黒に戻りピアスもしていないのは当然だが、顔は別人としか思えないほどやせ衰えていた。ふつくらとした体型だったはずが、わずか二週間でげっそりと萎み、目は落ちくぼんで頬はこけている。しかし問題は、外見ではなかった。

彼の眼にはもう、生氣はまったく残っていないなかった。焦点も合っておらず、病的なまでにうつろな眼差しだった。顔つきも前までは人をナメた憎たらしいものだったのが、今は完全に、喪失を思わせる死人のような相貌に変わり果てていた。力なくうつむき、背を曲げた姿勢も鬱屈としていて、見ているだけで虚無感に襲われた。

どう見ても、叱られたとか説得されたとかそういう次元を超えていた。何か異常なことが彼に起きたのだ、とはつきり見て取れた。

教室は静まりかえった。

八木沼はゆるゆると口を開くと、かすれた声で言った。

「……あの、ほんと……ほんとにみんなには、前はすごく、迷惑かけて……すいませんでした。俺、その、いろんな人に迷惑かけて……親も、困らせて、それでほんとバカで、クズでした。死んだ方がマシな、救いようのないクズで、ゴミで、本当に……申し訳ありませんでした」

誰も、何も言えなかった。

寺嶋が、何とかひねり出すように言葉をつないだ。

「あー……まあ、そうだな。八木沼も反省しているようだし、うん、じゃあ過ぎたことは忘れて、またこれから」

「いえ。忘れちゃいけないんです。俺はずっと、ずっといつまでも一生反省していないといけないんです。ホント、俺はどうしようもない、クソみたいな奴でした。最低でした。ごめんなさい。本当に、ごめんなさい……」

やめてくれ、と言いたくなる膿んだような文言を、八木沼はただひたすら、消え入りそうな調子で何度も何度も繰り返して話した。言葉の一つ一つが心の奥底に刺さってくる。聞いているこちらが不安定になる。

寺嶋も言葉を失い、「まあ……座れ」とだけ指示をした。八木沼は頷きもせず、大人しく従った。

その時。

不意に、ひどく明るい声が教室に響いた。

「お帰り！ 八木沼くん」

それは、速水さんだった。

そのあまりのズレ方に、オレは背すじがぞつとした。

「……ありがとう、速水さん」

八木沼はそう言つて卑屈な笑みを浮かべると、椅子の上で小さくなった。

「……あー……八木沼も、向こうでいるんな目にあつたかも知れんけども……そのー、それは、アレだ。みんな、お前のためにされたことだ。お前のことを心配して、それで親御さんも教官の方々も、な。ほら、分かるよな？ だから、それに対してお前は、カンシヤしないとイケない。だらう？」

寺嶋に問われた八木沼は、心から感謝しています、と無声音で応えた。

「魔法の言葉」を唱えているうちに元気が出てきたらしい寺嶋は、もう一度、同じことを繰り返した。

耳が腐るほど聞いた言葉だ。

「そう。道徳ドクトキャンプにしろ、学校やPTAからの指導にしろ、どれもこれもみんな、お前たち子どものために、やっていることだからな。うん。今は多少苦しくても、大人になったら必ず分かるんだ。どんなに大人たちがお前たちのことを心配して、親身になって考えてくれていたかが、きつ

と分かる。そして間違いなく、感謝することになる。だから親御さん達にも、今のうちから、感謝しておくように。みんな、分かったかー？」

誰も、何も応えようとしなかった。

寺嶋は咳払いした。

「……ええっと、それじゃ、プリントを配ります。保護者会の連絡ですんで……」

5.

そして翌日。つつがなく土曜日。

オレはこの一週間、心が安まる時がなかった。

『そわそわしてるんでしょ？』

いやそうじゃなく。そんな楽しみにしてたとかそんなじゃなくてオレはただ不安で、

『部屋も掃除したし、棚も片付けたし。お菓子とか用意してこようか？』  
いいってホントに。アイツらなんかほっときやいいんだよ。

『一時間も前からずっと待ってるじゃない』

あーもう。オレが精一杯怖い顔をしてやっても、双葉はふわふわと笑っているだけだった。今、静かな家の中にはオレと双葉の二人きりである。

そして午後一時を少し過ぎた頃、レイオウと終夜は別々にやって来た。リヴィングの窓から見ていると、レイオウは盛大に排気音を立てるバイクで颯爽と登場しウチの前に乗り付け、一方全身黒っぽい服装にヘッドフォンを装着した終夜は一人でふらふらと歩いて現れた。我が家はいわゆる閑静な住宅街に在しているので、出来ればもう少し不審でない手段を選んでほしい。

チャイムと同時に玄関を開けて迎え入れてやると、入ってきた二人は間延びした顔で、うちの内装を眺めていた。レイオウはジーンズ地のジャケツト姿で、前よりだいぶ取っつきやすい印象だったが、終夜は間近に見れば、着ているのはなんとダークスーツだった。首元を開けた薄いグレイのシャツに、緩く細めのネクタイまで締めている。今日も大きなヘッドフォンを付けていたが、それも服に合わせて、いつもと違うシャープなデザイ

ンのものに変えていた。

澄ました彼女の顔とメガネにマッチした、小じやれたファッションだとは思うが……

「……似合わないか」

いやすごく似合ってる、と正直な感想を言うと、へえ、と言って終夜は顔を背けた。

レイオウはサングラスを外し胸ポケットに挿してから話しかけてくる。なぜか彼は、片手に大きな紙袋を提げていた。

「愛。家族はどうした？ いねえのか？」

なんでだよ、と問うと、美少年は一人暮らしと相場は決まってるんだよ、と寝ぼけた返事が返ってきた。何の話だ。

「親父はどこかへ出かけたし、母親は追い出したし、姉貴は今日もバイト」

オレがそう答えると、レイオウは異常なまでの食いつきを見せた。

「え、お前姉ちゃんいんのか？ どんな人だ？ おい」

「……三次興味ないんだろ？」

「ああねえな。しかしお前の姉貴だったら二次に匹敵するクオオであってもおかしくねえ。そして姉貴つつう属性もいいもんだ」

非常に間違っている。

とりあえず、全員をオレの部屋に通す。入るなり終夜は背負っていた小さなリュックを降ろし、中から片手で持てるぐらいのモバイルを出した。部屋のテーブルに置くと、オレたちに向ける。

「……簡単にだが、作ってきた」

見るとそこには、ちょうどネットのチャットルームを簡素にし、入力しやすくしたような画面が映し出されていた。ディスプレイが上部と下部に分けられていて、上部の入力フォームに文章を書き込めるようになってい。終夜が test と書いてエンターキーを押すと、下部にそれが書き込まれた。一番上には FUTABA-Chat と凝ったフォントでタイトルが付けてある。

『これで会話出来る』

早速終夜はそう書いた。目を輝かせた双葉は、

『ありがとう！』

と書くなり、終夜に抱き付いた。小柄な終夜はオモチャのようにされる

がままになっているが、イヤな顔はしていない様子だった。

少なくともオレたちは四人とも、喋るのとそう変わらない速度でブラインドタッチが出来るから、画面上での会話にも苦痛を感じることはない。必要とあれば、口に出しながらでも書けばいい。足りない部分はオレが手話通訳すれば済むだろう。

『通信機能も持たせて各自のキーボードから書き込めるようになれば一番楽だが、当座はこれで我慢してくれ』

そっけなく終夜は書いた。これならレイオウも終夜も、いちいちオレを経由せず双葉と会話できる。そう考えると若干の不安を感じたが、杞憂だきゆうだと思いたい。

放っておくと勝手に人の部屋の本棚やヴィデオ棚やパソコン周りを物色し出すレイオウ&終夜を無理矢理引き戻してから、オレは二人にとつと本題に入りなさい、と命じた。

すると、なぜか微笑した双葉は手を伸ばし、滑らかな手つきでキーを叩いた。

『それで、用意は出来たの？』

『ええもちろん極上の品をご用意いたしました』

レイオウが淡々と返す。終夜は無表情のまま、ぽりぽりと頬をかいた。

ここへ来てオレは焦りだす。どういうことだ？ 双葉は今日の会合の目的を知っているのか？ 双葉に目で説明を請うが、なあに、とでも言いたげな顔でかわいらしく首を傾げるだけで応えてくれない。明らかにとぼけている。オレは急に、エイリアンに取り囲まれたような閉塞感を覚えた。

『何だよ！ 何なんだよ！』

オレは書くが、誰も返してくれない。三人はオレをじっと見ているきりである。恐怖だ。

そして三人がお互いに目配せし合うと、レイオウは持参した紙袋に手を突っ込んだ。低く渋い声で彼はファンファーレを口ずさむ。

「ジャジャジャ、ジャーン」

違った。ベートーヴェンの運命のモティーフと共に袋の中から何かが取れ出される。布？ 全体黒くてフリフリしたりボンがたくさん付いていて、これは、

ゴスロリ服？

しかも、

「はい。シルヴィア様の衣装でえす」

オレは部屋から駆けだした。

階段を転がり落ちるように駆け下りるが後ろからものすごい勢いでレイオウが迫ってくる。ホラーだ。懸命のダッシュ虚しく、家の外へ脱出する前にオレは捕獲された。

「イヤだ！ 放せ、絶対イヤだ！」

「何がだよ。まだ何するとも言ってねえだろ」

落着いた口調で言っているが、レイオウの口元は薄くにやけている。いかん。オレが嫌がれば嫌がるほど誤解を招く。

「ツンデレで言ってるんじゃない！」

「まあ話し合おう」

会話不成立。圧倒的な体格差にオレは持ち上げられて、お姫様抱っこで二階へ移送されていく。イヤだイヤだイヤだ。どんなに暴れてもレイオウの厚い胸板はびくともしない。だんだん呼吸がおかしくなってくる。視界がぐるぐる歪む。これは現実じゃない。信じちゃいけない。

オレが部屋に戻された時には、終夜と双葉が丁寧に服を床に広げているところだった。なんだこれは。完璧じゃないか。色合い、リボンの位置、長さ、スカート丈から襟袖の細かい飾り縫いまで見事なまでに寸分の狂いもなく、シルヴィア様だった。布地の質感にもありがちな安っぽさは感じられず、デザイン画を完全再現というヤツだ。ニーソまで添えてあった。笑えてくる。

「おい愛、何笑ってんだ。壊れたか」

「壊れもするだろ！ なに頑張ってるんだよ！」

「それが俺クオリティー」

意味不明なことを呟きながら、レイオウはオレを衣装に向かって押し出してくる。ヤバイ。吐きそうだ。双葉は驚く素振りも見せず唯々諾々と二人の悪事に手を貸している。いっぱいいっぱいの手話でオレは尋ねた。

『双葉、お前これ知ってたのか!?』

『え、うん、まあ……』

白目を剥きそうになった。

『瑞歩ちゃんからメールもらって、愛くんが気が変わって週の途中でやっぱりイヤだ、とか言い出さないように、私も一緒に遊びたいって愛くんに予め伝えておいてって』

そう、双葉が楽しみだ楽しみだと言っていたからこそ、オレも二人の誘いを断れなかったのだ。それが終夜の周到な心理トラップだったなんて。もう何も信じられない。

『何で協力したの!?!』

『あのね……愛くんいつつも、男物の服が似合わないって嘆いてたじゃない。それで私、前から、それならもう女の子の服着ればいいのにつてずっと思ってたんだよ。だから』

なん・でだ・よ!

叫びながら頭を壁に打ち付けなくなる。双葉は続けた。

『そのきっかけになればいいかなーって』

『なっっちゃダメだよ!』

『どうして?』

『どう……』

オレは言葉に詰まる。純な双葉の瞳には一点の曇りもない。目を泳がせるオレの横では、レイオウと終夜が肅々とコスプレの準備を進めている。

『そりゃ……ダメだろ』

『だからなんで?』

『オレは……オレは男だ』

『でも似合わないんでしょ? 男物の服も、学ランも』

『びっくりするくらい似合わない』

『だったらいいじゃない。似合う女の子の服着れば。楽しいよ、スカート』

『双葉は……いいのか、オレがスカート穿<sup>は</sup>いても』

『うん』

即答された。目の前の光景がフェードアウトするように明度を落としていく。気が遠くなってきたオレは、力なくベッドの上に腰を下ろす。

やっぱりだ。やっぱりそうなんだ。双葉にとってオレはただの美少女の友達でしかないんだ。男だなんて微塵も意識していないんだ。どこの世界に彼氏候補者へ「スカート穿いて」と頼む女の子がいる？ スコットランドの民族衣装じゃないんだぞ。ゴシックロリータなんて普通女の子でも着やしない。しかもラノベキャラのコスって。絶望した。

「ほれ」

と言ってレイオウが袋から何かを引っ張り出して投げってくる。顔を覆う手を開いて見てみれば、それは銀髪のヅラだった。律儀にリボンまで付いている。

「カラコンはさすがに高くて買えなかった……どうした？ 眼がうつろだぞ」

昨日の八木沼もしかしたらキャンプで女装を強要されたのかも知れない。体重がこの五分で二十キロくらい落ちたんじゃないかという気がする。やっとの思いでオレは訊いた。

「……なんで？」

「なんでって、コスプレをすることの意義についてか？ 俺は専門家じゃねえからな、思春期心理学の観点とかから答えるしかないが」

「違う！ なんでオレがコスプレすることになったんだっていうこと！」  
オレらのこんなしようもない会話も、逐一終夜がモバイルに打ち込んで双葉に読めるようにしてやっている。ありがたいことはありがたいが、あまり双葉に知られたくない。レイオウは腕組みしてうむ、と重々しげに応えた。

「理由はいろいろあるな。複雑に入り組んでいて、簡単に説明するのは難しい。ただ、一つだけ確かなのは、俺が是非とも見てみたい、ということだ」

「説明終了じゃないか。何でオレがレイオウのヘンタイ趣味に付き合わないきゃならないんだよ！」

怒り心頭にオレが拒絶すると、突然レイオウの顔色が曇った。遙かな高みからオレを見下ろしてくるその視線は鋭い。口も固くつぐみ、不快そうにオレに近づいてくる。

しまった、言い過ぎた。普段あんまりフランクで奔放な態度だからつい



忘れがちだが、基本的にレイオウは身長百九十近い大柄で強面の不良だ。怖い。般若のような凶相が、こちらに迫ってくる。オレは目を瞑って縮こまった。

レイオウは囁く。

「……お前だけじゃねえよ」

へ、と思つて目を開けると、終夜が袋からさらにごそごそと何かを取り出していた。

巫女装束と鉦（模造品）。

シルヴァーアークセ付きのタイトな全身黒革。

「お前が着るなら俺たちも付き合おうじゃねえか」

「このヘンタイどもめが！」

それぞれゼロミコのヤンデレヒロイン心、邪神降臨に出てくる邪神オリーブスのコスだった。どっちも再現度100%。そのあまりの完成度に呆れすぎて、オレは逆に感嘆し始めた。

「よくこんな売つてるとこ見つけたな……」

「お前は知らねえかも知れねえが、俺はお裁縫が得意なんだ」

聞きたくなかった。

「全部手製!？」

「ネットのそっち系の裏サイト駆使して布発注して。巫女なんかは簡単だしオリーブスは前から持ってたが、お前の分作るの大変だったんだぞ。終夜も手伝わせて、夜なべ仕事だ」

母さんでもないのにありがとう。じゃなくて、労力を使う先を間違えている。

「何がしたいんだよ……」

「オリーブスの格好ならバイク乗つても設定通りだし外見もおかしくねえからな。夜中に一人で走って発散してんだよ」

何をだ。妄念をか。レイオウは双葉を見やって言った。

「双葉ちゃんにも何か用意しようかと思つたが、さすがに早すぎるかと思つてな」

「ちよっ、冗談じゃない、やめろ、双葉を妙な世界に引き入れるな!」  
全力で止めにかかるオレにレイオウは白い眼で、横暴だなおいと呟いた。

何とでも言え。双葉はオレがヘンタイの国から守ってみせる。守っている人間がヘンタイ国民であるのが残念なところだ。少しでも加勢を求めようと、オレは終夜に縋る。

「大体終夜、お前イヤじゃないのか？　そういうオシヤレな服装が好きなんだろ？」

オレの雑多な部屋に不釣り合いなスーツ姿の終夜は、モバイルの画面から顔を上げ、数度瞬いてから応えた。

「違う」

「じゃあどういのが好きなんだよ」

「私は、他人と違う珍しい格好をするのが好きただけだ。内容は問わない」  
愕然としてオレは何も言えない。それってつまりコスプレ好きってことじゃないか。しかもすごく本来的な意味で。よって巫女OK？　激しい頭痛に襲われた。

「と……とにかく。オレは女装なんかしない。絶対に、しない！」

オレが断言すると、レイオウと終夜は顔を見合わせた。

さあどう来る。お前らが何と言おうとオレは決して屈したりなんか……

「そうか」

拍子抜けするほどあっさり、レイオウは頷いた。

「じゃあ仕方ねえな」

そして服を袋にしまい始める。戸惑うオレをそのままに、終夜も手伝っていた。空気が急激に冷めていく。気づけば双葉はじいっとオレを見つめていた。悪意のないその眼差しが痛い。

「え……いや、でも……その」

オレがぼそぼそ言うのと、レイオウと終夜も顔をこちらへ向ける。二人とも別に非難の目付きというわけではなく、べったりとした気のない面相だった。どう考えてもオレの方に分のある話だったが、せっかく夜なべまでして作ってもらったものを無下に突き返すのもさすがに悪い。

オレは目を落とした。

「なんか、申し訳ない、ような……」

「そうかそうかそうか」

途端にすっと立ち上がったレイオウはオレの頭をいきなりその大きな

手でがっしり掴むと、ぐしゃぐしゃにかき回した。にやああああ。

「無理をさせるわけにはいかねえがお前がそう言うならこちらとしてもありがてえな。ほれ、一式を贈呈しよう。虫が食ったりしないよう、大切にしまっておくように」

いつの間にやら綺麗にたたまれたシルヴィアさんの衣装が確かな重みを持つてオレの手の上に置かれた。茫然としているうちに、レイオウは理解ある大人物のような顔をして宣った。

「今すぐ着こなすというのも難しいだろう。俺もそこまでは期待していない。お前の気が向いたら好きなきに着ろ。身体に慣らしていくんだな。初めはこの部屋だけとか、家の中だけとかで試せ。そしていける、と思ったらいつでも連絡してくれ。すぐさま駆けつける」

呆けて立ちつくしたままのオレを放置してレイオウは双葉、終夜と共にテーブルの元へ戻ると早くも頭を切り替え、モバイルを通して双葉とお喋りを始めた。オレは動けない。腕の中に残ったしなやかな手触りの端整な縫い物を見下ろし、そして激しい疲労を感じた。三人とももうその話題は終わったとも言いたげな様子で、返品は叶いそうにない。

ああ分かったよ。受け取るだけ受け取って着なければいい話だ。しかしこんなもん親に見つかったら何を言われるか。特A級最重要機密保管場所へアレゲな本と共に隠しておくより他ない。

とりあえず服を机の上に置いてから三人の会話に加わったオレは、ずいぶん簡単に引き下がったな、と皮肉を込めてレイオウに言う。すると、焦っても仕方ないだろ、とレイオウは小声で独りごちた。

「長期計画だからな」

「今何て言った？」

別に、とお気軽な不良は遠い目をしてごまかした。

6.

それからオレたちは、双葉を中心とした会話で盛り上がった。というか盛り上がったのは正確にはレイオウと終夜で、双葉に向かって家のこととか、学校のこととか、友達のこととか、趣味は何か、オタクというも

の存在をどのように捉えるか、好みの男性のタイプは、逆に鬱陶しいのはどんな男、などなど根掘り葉掘りパーソナルデータを聞き込んでいた。普通なら嫌がるようなことでも双葉はああいう、ある意味開けっぴろげな人間なので平気で応える。むしろ横にいるこっちが冷や冷やした。

だもんだからオレとしても、ついつい口出ししてしまう。

『フタバはなぜカミシナといつも一緒にいる？』

『そんなこと終夜は気にしなくていいだろ』

『で、双葉ちゃんにとって神志那愛とは』

『レイオウには関係ないだろ！』

『いつごろカミシナを捨てる予定か』

『知ってどうする！』

『しっかしもう二人とも十四なんだしよ、ずっと今みたいな関係のまんま  
ってわけにも』

『ああああああもううるさい！』

オレがモバイルを横取りしてそう書くと、レイオウ・終夜がギロリと睨んできた。元々人相のよろしくない二人なのでその迫力はなかなかのものであり、オレは身じろぎする。

レイオウは少し思案する表情を見せた後、ちよつとこっち来い、とオレの首筋をネコのように掴んで、部屋の外へと連れ出した。終夜は何事もなかったかのようにまたモバイルへ戻ると、双葉にまた何か訊いている。ああ気になる。どうせまたろくでもないことに決まってる。

廊下の突き当たりのドアの前までオレをぐりぐり引つ張ってくるとレイオウはようやく手を離し、この部屋いいか、と訊いてきた。

「姉貴の部屋だから。ダメだよ」

「じゃあ入るぞ」

「ここでもいいから話があるならさっさと本題に入って」

レイオウは両手をポケットに突っ込み壁にもたれ掛かり、口をへの字に曲げ醒めた顔でオレを見ている。マジメな顔していれば本来は整った顔立ちでかなりいい線行っているのに、それなのになんでこんなことになってしまったんだろう。

「独占禁止法って知ってるか」

唐突な出だしにオレは困惑する。

「はあ？」

「略して独禁法、響きからも察せられるように男女間の感情の機微にまつわる法律だ」

「頭大丈夫か」

「ホレてるからといって異性を独占しようとするのは法で禁じられているということだ」

お前独占欲強すぎ、とレイオウは鋭く斬り込んできた。

「な……何がだよ」

「双葉ちゃんのことに関わってんだろが。なんだよあのヒステリックな反応。他のことは割と興味ねえって感じでスルーすんのに、双葉ちゃんのことと女装のことになるとすぐキレル」

「なぜ女装を持ち出す。別に……双葉がどうってことじゃなくて、お前らに変なこと訊くから」

「何が変なことだ。最大の疑問をぶつけてるだけじゃねえか。あのな、幼なじみってのは本来拘束力はねえんだよ。マンガやエログレの中では大した理由もねえのに中高生なるまで延々仲良しでいるがな、あんなもん大ウソだ。現実では幼なじみの女なんか古馴染みのよく見知った男にとっとと見切りつけて新鮮な別の野郎を捕まえるんだよ」

「なんか嫌なことでもあったの？」

オレたちは無言で見つめ合った。

「にもかかわらず双葉ちゃんはこの歳になってもお前と、進んで自ら毎日のように会っている。あそこまでのハイクオリティー美少女に成長しても、だ。ただの義理や人情で出来ることじゃねえ。だからその辺どうなってるんですか、と訊いた」

「余計なお世話の典型じゃん」

「どうせお前一人で放つといたって十万年経っても話は進まねえだろ。手助けしてやったんじゃないか。感謝しろ」

「終夜なんかオレが捨てられるの前提だったぞ」

「そら、捨てられるのを楽しみに待ってるからな」

なんとという悪女、とオレが呟くと、隣れなり終夜、とレイオウはとんち

んかんなことを言った。意味が分からない。憐れみをかけられるようなマじやないだろ。それはともかく。

「オタダのエロダのそういう歪んだ物事には双葉は接しなくていいんだよ！ オレは双葉を、そんなのから守ってんの！ 何か悪いか！」

「悪いだろが」

いきなりレイオウは真剣な顔になった。

「なあにが守るだ。守らせてもらってんじやねえか。あんな、双葉ちゃんはお前なんかを守ってもらわなくても、なんつともねえよ。頭もよくて美人で萌えて話し上手でしっかりしててちよっぴり抜けてて優しくて明るくて、文句のつけようがねえだろ。一人で十二分にやっつけていける。守る云々でお前が彼女に関わる余地は、はっきり言や微塵もねえ」

「なんでレイオウにそこまで言われなきやならないんだよ！」

結構本気で腹が立って怒鳴ったオレに向かって、まあ落ち着け美少女、とレイオウは火に爆薬を投げ込むようなことを言った。一番気にしているところを。

そしてレイオウは、一言こう断言した。

「お前が今双葉ちゃんにやってることは、キョーイクシヨ教育省だのPTAだのがふんぞり返ってほざいてる崇高な理念とやらと一緒にだ。コントロール」

オレは、何も応えられなかった。

「頭に来るってことは多少は思い当たる部分があんだろ？ だからアドヴアイスしてやってんじやねえか。そういう主人公気取った勘違い野郎のままでは未来はねえぞ、ってことだ。幼いたいけ気でか弱い乙女を守る孤高のオトコなんて、頭腐ったオッサンの妄想。諦めて違う道を探せ」

あっさりそう言っただけのけると、レイオウはすたすた部屋へと戻っていた。オレは一人、廊下に取り残される。

なんだよそれ。勝手なこと言っただけ。オレのやってるのがキョーイクシヨ教育省と同じ？ オレは別に、そんな……

双葉を……

ううん。

オレは双葉と、どうなりたいのだろう。

突きつけられた小学生のような問いに悩み頭をくしゃくしゃと掻きながら

ら廊下を歩き、そしてオレはため息をつきながら、自分の部屋のドアを開けた。

中では三人が、オレのパソコンを勝手に立ち上げて中を覗いていた。

悪夢再来。迷いなく突進したオレは終夜の乗った椅子を蹴る。そのままの姿勢で終夜は椅子ごと壁に向かって飛んでいった。さらにマウスを握るレイオウを渾身の力を込めて引きはがしベッドに投げ、双葉の眼を左手で覆い隠してから画面を見た。

マイコンピュータ	←
Dドライブ	←
マイドキュメント	←
マイピクチャ	←
シークレットフォルダ	↑今ここ

信じられない。本当に、本当に信じられない。こんなことが許されてはならない。絶対に。

「言っとくが、やったのは終夜だぞ」

レイオウはさっきまでの男前発言はどこへやら、開口一番責任回避を始めた。オレが眼を向けると、終夜がゆらりと椅子から立ち上がる。そしてぼそりと言った。

「……あと一歩だったのに」

ホントだよ。まさしくギリギリだった。次のフォルダを開かれたらシークレットガードオープンでオレの人生が終焉を迎える。双葉にあんまの見られたらオレは、オレは。

掴みかからんばかりにオレは終夜を問いつめた。

「どうやってパスワードを突破した!？」

姉貴とは訳が違う。すると終夜は、デスクの上を指さした。そこには終夜のモバイルが載っていて、オレのパソコンと何やら見たこともないコードで繋がられている。小さな画面には、見るからに無骨な手製のプログラムが開かれていた。

「……一般家庭用OSのパスなど無いも同然だ」

ハッカーかよ。そしてオレは、何よりも不可解なことを尋ねた。

「何でこんなことするんだよ!？」

一般人の双葉ならともかく、終夜がオレの画像コレクション見たって面白くも何ともないだろう。終夜はそれを聞くと、眼を逸らして自分の服の裾をいじいと引っ張るばかりでなかなか応えようとしない。しばらく経ってから、最後にシンプルな理由を述べた。

「……見たかったからだ。悪いか」

「悪いよ。これ見られるのどれだけイヤかはお前だって知ってるだろ! だったらお前のフォルダ全部オレに見せるのか!？」

「……カミシナが見たいのなら、私は見せても構わない」

Dドライブを、じゃなかったら割と色っぽいセリフだった。

椅子を引いてきてパソコンの前に座ると、オレは他に何かいじられていないかチェックする。それを見ると双葉は、

『インターネットのも瑞歩ちゃん何かしてたよ』

と証言した。どこを!?!ともう半錯乱状態のオレは問う。すると、突然双葉は何を思ったのか、オレの横にぴったりとくっついてきて、画面を指さした。

双葉はすぐ隣、身体が触れるほどの側に寄り添ってココ、ココ、と一生懸命ディスプレイを示している。そして同時に、その、えーと、彼女の豊かな胸がオレの腕に当たる。これはまあいつものことではあるけれど……でもなんだか、今日はいやに性急というか、普段よりも少しきこちなく感じた。顔の方も、髪がオレの頬をくすぐるほど近くにあって、双葉の吐息がオレの唇にかかる。どうしたんだろうこれ。

戸惑いながらもオレは、双葉が教えてくれた履歴にアクセスする。それを見て、オレは目を疑った。



画面に現れたのは、複数の無音の動画ばかりだった。映っているのはいずれも、これと違って面白みもない普通の街の風景。上部にタイトルが振られている。

【商店街前交差点C】

【街灯38-β】

【3番公園広角】

【私立美園学園中学校231教室】

これは……

「PCシステム監視カメラ画像」

終夜がこともなげに答えた。

「保護員が端末から見られるよう用意された、キョーイクイインカイ教育委員会の内部向けサイトだ」

「何でそんなものに繋いで……」

「クラッキングの練習くらいにはなる。あつて困るものでもない」

クールに終夜は言い放つと双葉の反対側に立ってマウスを手に取り、サイトのあちこちを開いて見せた。いやに肩が重いつつ、背後でレイオウがオレに寄り掛かって画面を覗いているようだ。

【駅構内3番ホームD】、【アニメショップ前(特危・要注意)】、【4丁目通学路7番電柱】、【県教育委入口】なんてのもあった。【電車・8番車両5号車B】というヤツはおそらくは痴漢防止のためだろうが、それ自体が盗撮画像にしか見えない。

オレがいつも乗るバスの車内も、うちのクラスの教室も、近所のコンビニの店内も、時々通る感じのいい散歩道も、母親が買い物に行くスーパーも、昔遊んだ空き地も、どこかで見かけた団地の外廊下まで、すべてが映されていた。

しかも画面はゆるゆると、子どもを追って動いていた。

オレは、何だか気分が悪くなった。

『これ……どういう役に立つの?』

微妙な顔をした双葉がモバイルに書き込んだ。終夜が返す。

『私たちには何の役にも立たない。大人たちは、これで児童を狙った犯罪を抑制できるのだと、本気で信じ込んでいる。でも社会学的心理学的、あ

るいは統計学的根拠はまるでないらしい』

『イワシの頭くらいの価値はあんじゃね？』

皮肉に笑んだレイオウが、手を伸ばしてさりと古風なことを書く。

『PC教な。これでジジババが黙るんだから安いもんだ』

そして、今度俺んちでもこれ出来るようにしてきてくれよ、と終夜に頼んでいた。オレはさらに画面をスクロールして、他にどんなところが見られるのか調べてみる。小学校の校庭とか、そこらの裏道とか、市役所前とか。尋常でない細かさ、よくぞここまで、と思わされる。

大人たちは一体、何を恐れているのだろう。

7.

その後もオレたちは、何だかんだ言いながらバカなお喋りをして騒ぎ続けた。レイオウはオレの本棚の秘密を暴こうと頑張つて、恥ずかしい音源、恥ずかしい動画、恥ずかしいゲームまで発掘するし、一方終夜はなぜか人のタンスを開いて、オレの服だの下着だのをしげしげと眺めていた。楽しくなってしまったらしい双葉も、それらに便乗してオレの私物を手にとつて喜んでいる。

もちろんオレものうのとそんな傍若無人な振る舞いを許したわけではない。何とか阻止しようと懸命の努力を続けたが、結局最後まで右往左往してただけだった。もう散々だ。

「レイオウ触るな！ そつちもダメ！ 絶対分かってやってるくせに、もう！」

「終夜、女子が男子のそんなもん見たって面白くないだろ！ そこいじるなって。イヤガラセか！」

『双葉あの、それは別に趣味で買ったわけじゃなくて、その、若気の至りっていうか……』

でも、不思議と腹は立たなかった。

夕方になり、母親が買い物から帰ってきたのでオレたちはそこでお開きということにした。軒先に置かれていた大きなバイクに相当驚愕したらしい母親だったが、息子の部屋から人相の悪い巨人とチビが出てくるに至っ

て、眼が点になっていた。

家を出てからレイオウがふと思いついたように、紙袋から巫女コスを取り出して終夜に手渡した。終夜は腕の中のそれを、しばらく無言のまま見つめる。オレは終夜がその格好をして鉈を手に持った姿を想像したが、すぐにそれが、いつか見た悪夢の再現だと気づいて凹んだ。まあ、終夜はまさしく巫女体型だし、着ればさぞかし似合うだろう。見てみたい気はする。

「そのためにはまず愛が着ねえとな。ゴ・ス・ロ・リ。楽しみ〜」

突然横からレイオウが重低音で耳打ちしたのでオレは飛び上がった。視線の動きで思考を読まれていたらしい。ニタニタ笑うレイオウ。オレはバツが悪い。

『次はいつ遊べる？』

双葉が終夜の手の中のモバイルにいきなりそう打ち込んだので、オレは目を丸くした。そんなオレに気づいた双葉は、俺の目をのぞき込む。

『イヤ？』

イヤじゃ、ないけど……

『私は楽しかったよ。二人とも面白いし、いろいろ見せてもらったし、愛くんの内緒のあの』

それはいいから。頼むから忘れて。

『たくさんお喋りできたから嬉しかったよ。またこうやって遊ぼう』

『ああ、俺ならいつでもいい、バイクの仲間は夜十時以降だからな。それまでは基本ヒマだ』

『……じゃあまたカミシナも参加しろ。いいな』

オレ不在のままぼんぼん話が進んでいく。じゃあ、って何だよ。

判然としないうちに予定はまとまり、全員集合するのは来週の日曜、後は各自適宜話をつけて自由に遊ぶ、ということになったらしい。一切合切が決まってからオレは決定稿のみを知らされた。ま、別にいいですけど。

そして、バイクに乗り爆音を立てながら去っていくレイオウ、再びヘッドフォンを装着し手には巫女衣装をまんま抱えて闇の中へ消えていく終夜に向かって、双葉はいつまでも、手を振り続けるのだった。

『ほら愛くん、お部屋片付けに行こ』

百点スマイルの双葉はオレの手を取り腕を組むと、一緒に家ウチへ向かって

歩き出した。

ま。別にいいですけど。

8.

それから、約一週間。

毎日がお祭り騒ぎだった。

まずその日の晩、早速深夜一時半頃に終夜からメールが来て、「明日の日曜は空いているか、もちろん空いているだろう、私は行きたいところがある、カミシナも来い」と債務通知のように一方的な文章が書き連ねてあった。別にいいけど、と諦めの境地で返信すると、五分空けずに時間・場所・予定などの連絡に加えて、必ず一人で来るように、という身代金受け渡しの常套句が添えられた再返信が、矢のごとく飛んできた。

仕方がないので明くる日曜、犯人の言うとおりの時刻に間に合うようオレは家を出た。すると、家の前でたまたま双葉と鉢合わせた。どこ行くの、と訊かれたので終夜に呼び出しをくらったと正直に応えたら、なぜだか双葉は、『私も行く』と言って聞かなかった。

珍しいほどの剣幕に断ることも出来ず、オレはそのまま、双葉と一緒に駅前の待ち合わせ場所へ行き、そして終夜は命令に従わなかったオレに対し、盛大に立腹した。

その後はもうさらに大変で、あっちへ向かいこっちへ引きずられ、よく分からないまま丸一日、二人に振り回されっぱなしだった。

また別の日は、レイオウに呼び出された。一度二人きりで話をしたかったと宣<sup>のたま</sup>うレイオウに著しく不安を覚えたが、会ってみればなんてことはない、オレをさらにコアなオタに引き込もうという洗脳作戦を実行しようとしているだけだった。駅前商店街のアニメショップを二人して渡り歩きながら、マンガやアニメについてああでもないこうでもないどちらでもよいことを語り合うだけ。まったく生産性のない、アホな時間だった。

レイオウと終夜だけでも何度か会ったみたいだし、双葉の家に終夜が行

くこともあったらしい。間違ってもオレに黙って双葉を連れ出したりしないように、とレイオウには釘を刺したが、ヤツは底意地悪く笑って独禁法と独禁法と言うばかりだった。まったく。双葉も何も言わないので無断で会ったりはしていないと思うが、どうも不安だ。

後は、オレ×レイオウ×終夜のオタサミットも開催され、ぐったりマニアックトークが夕暮れ時のファミレスに飛び交うなんていうこともあった。

レイオウが萌えの歴史の変遷と今後の展望について力説したときは全力ダッシュで帰宅したくなったものだ。しかも、何だか知らないがレイオウは異様なまでの甘党、終夜は異常なまでの辛党で、見ているこっちが気持ち悪くなった。こちらあんみつクリームパフェと十五倍ハバネロスープになります、と言うウエイトレスの視線が痛い。それに注文している三人組の取り合わせも滅茶苦茶なのだ。オレ一人赤面し通しだった。

その他、普段通り双葉とも会って遊んだりしたが、あの日以来、スキップがやたら積極的になったような気がする。こう、その、いろいろと……カゲキで。くつついたり、当たったり、暖あたたかかったり。

それでいながら、どうかしたの？と双葉に訊いても応えてくれないのだ。あいつらが変なことを言うから、双葉も意識しているのかも知れない。まあ、オレとしても嬉しいといえは嬉しいけれど、今の安定した関係が崩れるのではないかと心配にもなる。今みたいなゆるふわな関係がいつまでも続いてくれれば、それでも満足なのだから。

以上、ハイライト終わり。まあ、そんなこんなでんやわんやな一週間だった。毎晩のように帰宅が遅れて母親には叱られたが、オレを責められても困る。悪気があったのじゃないんだ、とこれじゃどっかの帰宅拒否のオッサンのような言い訳だけだ。

とりあえず、こうした何もかもはアレだ、「それはまた別のお話」というヤツである。どれもこれも、いちいち話し出したらきりがない。どうとということのない日常のありふれた出来事だからこそ逆に、かいつまんで説

明することが出来ない。一旦話を始めると、一から十まで微に入り細をうがち語らなくては意味がない。だから、ここでは省略する。  
ただ、これだけは言ってもいいかな。  
楽しかったよ、割と。

9.

そうしたあれこれで夜更かしが続き、学校でも授業中ぐーすか寝てしまつて教師に叩き起こされることもあった週の最後、金曜日の放課後。

帰ろうと下駄箱へ向けて廊下を歩いていると、校内放送が入った。生徒指導担当でもあるセクハラ魔人寺嶋の声だ。

「神志那愛くん、神志那愛くん、今すぐ職員室まで来てください」

……なんですか、一体。

10.

「はい、それじゃあ今日の練習を始めます！ 礼！」

今日は三年生が練習試合で他校に行っているため、美園学園中学女子テニス部の練習は倫が仕切ることになっていた。倫のそんな言葉に続き、お願いします、と黄色い声が揃う。

倫は二年生の中では一番上手い。のみならず、人望も確かである。三年生を負かしてトーナメントで上位に入ることもしばしばで、次の部長は間違いないと倫であろうと目もくされていた。

ただ——それだけに嫉妬する者も多い。

「最初は三十分間、サーヴ練習です。始め！」

一斉に部員たちは、ファーストサーヴの練習を始める。ラケットがボールを弾く爽快な音が、コートに幾重にも響き渡った。すでにアップを終えている倫の額からは、早くも玉のような汗が滲しみんでいる。

その時、相手方のコートから飛んできたボールが、倫の左肩を直撃した。

「大丈夫、倫!？」

周囲の仲間たちが、すぐさま駆け寄る。大丈夫よ、ありがとう、と倫は応えるが、しかし痛みはかなりのもので、思わずよろめき、コートにひざまずいてしまった。

すると反対側のコートから、ふん、と高慢な声が聞こえた。

「まったく、どこを見て練習しているのかしら」

それは、倫を普段からライヴァル視している、田所たどころ奈美なみであった。倫の友達は、憤慨して声を荒げる。

「あなた、狙ったんでしょ!?!」

「何を言うのよ。そんなわけないじゃない。速水さんが避けられなかったのが悪いのよ」

倫は身体を起こすと、まっすぐ奈美を見据えて言った。

「奈美ちゃん。あたしに不満があるなら、何でも言っただけ。あたしたち同じ部の仲間だもの。我慢するのはよくないわ。だけど他のみんなに迷惑を掛けるなら……あたし、許さない」

「……テニスで決着をつけましょう」

長時間にわたる激しい熱戦の末、倫が辛くも勝利を収めた。

「……今日のところは負けを認めてあげる。でも、次からはこうはいかないわよ!」

そう捨て台詞を吐くと、奈美はコートを後にした。

すると途端に、倫の周りには彼女を慕う部員たちが一斉に集まった。

「倫。すごかったわ、あのラリー。私、途中でもう駄目かと思ったもの」

「あんな鋭いスマッシュどうやって打つの？ 今度教えて」

「速水先輩。ほんと……感動しました！ とっても格好良かったです」

「いいのいいの。みんなも応援してくれて、ありがと。嬉しかった」

渡されたタオルで汗を拭いながら、倫は笑顔で応じる。

そう。倫は部活でも、誰より好かれている。みんなが倫のことを愛してくれる。巧みな選手であることはもちろん、面倒見もよく、優しく、正義感も強く、皆を公平に扱い、指導も見事なのだから。三年生からも信頼を置かれていた。今日のようにいろいろと大変なことはあるけれど、それで

も毎日充実した部活動を送っていた。

倫はスポーツで汗を流すことが大好きだった。身体を鍛えれば、心も強くなる。こんなに楽しいことはないと思う。もちろん勉強もいいけれど、そればかりでは頭でっかちになってしまう。日々の運動が、正しい善い人間を育てるのだ。自分もそうあるよう、心がけている。

奈美のように、他人より偉くならないと我慢できない人もいる。だけど、そんな人でも正面から向き合って、きちんと話せば必ず分かってくれるはずだ。世の中には善くない人もたくさんいるけれど、それでも自分はそこから逃げることなく、立ち向かっていきたいと倫は思う。

そして、ふいに思った。

愛くんは、どうしているのかな。彼はスポーツやらないのかな。彼は電氣部だし、体育の授業でもあまり熱心に参加しているところは見たことがないけれど。でもきつと、一緒にやれば楽しいものだって分かってくれるわ。こんな善いものを、愛くんが理解してくれないわけがないもの。

そうだ、今度の試合に愛くんを招待するのはどうかな。来てくれるかな。彼とっても優しいから、あたしがお願したらきつと来てくれる。訊いてみよう。でも緊張するな。いつ訊こう。それにもし来てくれても、彼が見ていると思ったらあたし失敗するかも。

ううん、それでもいい。彼が来てくれたら、そのことがあたしの勇気になる。彼がいてくれるだけであたし、頑張れる。彼のためにも、負けられないな。なんだかもう、試合が楽しみになってきた。よし、練習しよう。

今週は瑞歩ちゃんともお話しできなかったし、それにクラスの中でひどい噂話の事件があったりして大変だったけど、でもあたしの力で何とか出来て、本当によかった。来週は今週より、もっといい週にしたいな。それにはまず、愛くんを自信を持って試合に呼べるよう、もっと練習をしないと。瑞歩ちゃんにももっと、積極的に話しかけてみよう。

もっと楽しく、もっと頑張つて、もっといろんなことに挑戦しようつと。あたしの人生、あたしの世界は、あたし次第なもの。

そんなことを考えて、倫は勢いよくラケットを振った。